庄野潤三全集

第三巻

庄野潤三全集　第三巻

講談社

庄野潤三全集　第三巻

昭和四十八年九月四日　第一刷発行

著　者　庄野潤三
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二丁目一二一二一・郵便番号一一二一
電話　東京(〇三)九四五一一一一(大代表)・振替　東京三九三〇
印刷所　図書印刷株式会社・株式会社興陽社
製本所　大製株式会社
製函所　株式会社岡山紙器所
定　価　一六〇〇円
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
©庄野潤三　昭和四十八年　Printed in Japan

0393-131935-2253 (0)　(文1)

庄野潤三全集　第三巻

目　次

ガンビア滞在記
《静物》
静物 227
蟹 290
五人の男 306
相客 334
イタリア風 352

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

《単行本未収録作品》
太い糸 391
父 405
《旅人の喜び》*
ニューイングランドびいき 423
庄野潤三ノート 阪田寛夫 466

装　幀・岩本正雄
口絵写真撮影・野上　透
（昭和48年3月、自宅書斎にて）

庄野潤三全集　第三巻

ガンビア滞在記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一　オハイオ州ガンビア

「ガンビアにどのくらい居るか？」
「今年が十年目だ」
「大分長い」
「長い。もうずっと前のことのような気がする。初めてガンビアへ来た時、東部から来た。この道でなくて、反対側から来た。夕方で、もう暗くなっていた。ところが行けども行けども両側に見えるのは農園ばかりで、その間を曲りくねった川がひとつ流れているきりだ。いったいどこに我々の行くカレッジがあるのかと思った。すると、(ハンドルから離した手で指を鳴らして) ガンビアに着いた」

（シュワルツ教授の話）

私は最初この町の生活を報告するのに何から始めたらいいか決めかねていた。
ガンビアの入口に聳え立っている一本の大きなプラタナスの木のことからか、それともマウント・ヴァーノンからガンビアへ来るオハイオ二二九道路からの見晴しのことからか、それともガンビア

に入ったとたんに私たちの眼の前に現れるココーシング川のことからか、それとも……と云う風に。
それを考えていると、私はガンビアがそもそもアメリカ大陸のどのような地勢のところに位置しているか、先ずそのことから述べる必要があるのではないかと云う気もして来る。
ガンビアに来て間もない頃、私と妻をマウント・ヴァーノンまで乗せて行ってくれた男はよくしゃべる男で、私たちに地理を教えてくれた。あの坂道をふっ飛ばしながらである。
彼によると、マウント・ヴァーノンは中部平原が終ってまさに東部アパラチア高地へ移ろうとする、間一髪というところに位置している町だそうだ。
マウント・ヴァーノンに生れてそこでずっと育ったと云う彼には、それがどうやら誇らしいことであるらしい。なるほど車でガンビアから下って来ると、二つ目の急な坂にかかった瞬間、突然眼の下にマウント・ヴァーノンの町とその後ろにひろがる平地が見える。
男の云う通りである。
もし東部から旅行して来た人なら、ここで、
「ああ。山は終りで、これからいよいよ平地だ」
と連れの細君と子供に云うかも知れない。一人で旅行している人なら、「今まで走って来たところは山だったのだな」と自分に向って云うかも知れない。
それとも私はいきなり大通りから始めて、郵便局か、銀行か、二軒しかない食料品店のことか、「村の宿屋」という名前のレストランか、三十四年もここにいる散髪屋のことから報告すべきであろうか。
私はそんな風になかなか決めることが出来ないでいた。ところがある朝、私が郵便局から帰って来ると、私たちが入っているバラックの前の道の電信線の上を栗鼠が一匹、木の実を大事そうに口

にくわえて渡って行くのが見えた。
こんな上を通るのは訳ないことだと云わんばかりの落着きはらった顔で、少し行っては止り、また少し行っては止り、見ているうちに道路のはしの電信柱に到着、そのまま林の中へ消えてしまった。
私は栗鼠がそんなことをするのを初めて見た。文福茶釜の綱渡りと云うのはお伽話で知っているが、栗鼠も似たようなことをするのである。それを見たので、私は何はさておき先ずこの栗鼠のことから始めるのがいいと思った。
確かにこの町の栗鼠は、町全部をわが家と心得て、何の心配もなさそうに走り廻っている。いたずらっ子が来て追っかけることもないように見受けられる。
昔はどうだったのだろう？　この小高い丘陵の上に森を切り開いてケニオン・カレッジが建てられたのは、今から百三十年ほど前のことだ。その当時は学校を一歩離れると、がらがら蛇がたくさんいるので、カレッジの創始者であるフィランダー・チェイス氏は、学生を率いてがらがら蛇退治に大童であったと伝えられている。
がらがら蛇がそんなにいては、栗鼠も油断が出来なかっただろうと思う。
彼等はいったいどの木を自分の寝泊りする木と決めているのだろうか。この木からあの木へ、あの木からこの木へと、まるでそんなことなど考えてなんかいないように自由に登ったり、降りたりしている。
地面を走る時はかなり早く走る。急に止ったと思うと、身体を真直ぐに起して、両手を顔の下へ持って行ってしきりと口を動かしている。木の実を食べているのである。
そんな時、人が近くを通りかかっても、栗鼠は構わずに食べ続ける。止めて逃げたりしない。も

し私が立ち止って栗鼠の方を見ると、やっと気が附いたように食べるのを止める。歩き出すと、すぐに食べ始める。私が立ち止ったまま動かないでいると、

「この人は何をしているんだろう？　早くさっさと行ってくれればいいのに」

と云う風にじっとしている。

しかし、決して私の方を見はしないのである。私があんまり長く立ち止っていると、やっぱり怪しい人だと思うのか、ぱっと逃げて行ってしまう。

木の実を食べている時の栗鼠は、どうしてそんなに急ぐのかと思うほど大急ぎで食べる。しかし、どんなに急いで食べても、姿勢は実にいい。それには私は感心する。

一度私は木の上で栗鼠が木の実を食べているのを見ていたことがある。その時、私は小さな栗鼠が頂上に向ってどんどん登って行くのを見て、いったい上の方のどこかに巣があるのだろうかと思って見上げていたのだ。

するとその栗鼠は大方頂上近くの大枝の先まで行って、降りて来た。無駄なことをする栗鼠だと思ったが、それは私の間違いで、その大枝が幹から分れているところまで来ると、立ち止って木の実を齧り出した。

その小さな栗鼠は運動のために木の頂上近くまで登ったのではなくて、木の実を取りに行ったのである。私が馬鹿みたいに見上げていると、皮が次から次へと落ちて来る。栗鼠が齧っては顔を横に振る度にそいつが落ちて来て、根もとの近くに散りしいている枯葉の上に小さな音を立てる。

こんなに皮ばかりむいていて、食べるところはあるのだろうかと私は心配する。落ちて来たやつを手に取ってみると、小さな歯でむしった跡がある。

顔を振るのを止めたなと思ったら、もう別の大枝に飛び移っている。固い木の実の中にある柔い、

おいしい部分は、ほんの僅かしかないらしい。

栗鼠の家であるガンビアの林は、いま冬に向ってその色を変えつつある。多くの木はまだ夏のままの姿に見えて、その中に上から下まですっかり黄色になった木と、上の方から紅葉して行く木と、紅葉しないで散って行く木とがある。

二　郵便局

ガンビアの町の人は大通りにある郵便局の中に各自のボックスを持っていて、毎朝郵便物を取りに出かける。配達はしないが、速達便が来た時だけ、家まで届けてくれる。私たちは一年しかここにいないので、局渡しの方法で窓口で受け取る。

ここの郵便局には局長以下四人の人が働いている。私は始めのうち一番背の高い、色の浅黒い男が局長だと思っていた。この人は少しいかめしい感じがしたから。ところが局長はこの人でなくて、私が臨時に働いている人かと思っていた、小柄で人の好さそうな顔をした爺さんであった。

この人は私たちが来たばかりの頃、局にいなかった。ある日、これまで見たことのない爺さんがまめまめしく働いている。他の三人が椅子に坐っているのに、この人ひとり忙しそうに動き廻っている。私が切手を買って手紙を出そうと思うと、自分でさっさと切手に唾をつけて封筒に貼ってくれ、その上、帰りがけには朗かに笑って、「サンキュー・サー」と云う。

それで私はこの人が臨時に手伝いに来ている人だと思ったのだ。もっとも、後になって、郵便物の目方を計る時、四人の中で一番厳格なのもこの局長であることが分った。

私が始め局長だと思っていた男は、応対の時の態度が少しいかめしく見えたが、何度も顔を合せ

ているうちに私は親しみを感じるようになった。彼は笑い顔は見せないが、丁寧であった。この人も頭は大分薄くなっていた。

三人目はやや陰気に見える若い男である。彼は片方の足が悪いので、椅子から立ち上って歩く時、少し跛をひいている。私はこの人の名前だけ知っている。ホーマーというのだ。

私は彼が独身の青年で、足が悪いためにこうして郵便局のようなところに勤めているのだとばかり思っていた。ところが、ずっと後で英文学のサトクリッフ教授に連れられてこの人の家へ行った時、彼が二人の男の子の父親で、しかも八十匹の羊と四匹の親豚とを飼い、まだそれ以外にかなりの面積の畑を持っていることを知ってびっくりした。ホーマー氏は郵便局へ出ている以外の時間は、自分の家の農園の仕事をやっているのである。無論、奥さんも畑を手伝うし、子供も学校から帰ると豚や羊に餌を運ぶ仕事を手伝うそうである。

しかし、それにしても中心になって働くのはホーマー氏である。もう一つ驚いたことは、今住んでいる新しい家はこの場所から大分谷の方に下ったところに建っていた前の家をばらばらにして、それをもとにして建て直したもので、その工事をホーマー氏が大部分自分の手でやったということだ。

前の家はホーマー氏のお父さんの家で、古くなったのと農園まで行くのに坂を上り下りしなければならない不便があるので、畑のすぐそばで見晴しもずっといい今の場所へ移すことに決心したのだそうだ。リビング・ルームの窓は谷間の方に向ってずいぶん広く取ってあり、ワイド・スクリーンを見るようであった。

ホーマー氏は私たちに農園を見せたあとで、その見晴しのいい部屋でビールを出してくれ、帰りがけには本棚から「オハイオ州ノックス・カウンティ」という三冊続きの大部の年代記まで貸してくれた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com